



自治体史編纂と震災資料：『岩沼市史11 特別編Ⅲ 震災』における震災叙述（時評・書評・展示評）

天野，真志

(Citation)

Link：地域・大学・文化：神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 15:120-126

(Issue Date)

2023-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100489544>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100489544>



自治体史編纂と震災資料

——『岩沼市史Ⅱ 特別編Ⅲ震災』に
おける震災叙述——

天野 真志

はじめに

東日本大震災被災各地では、地域の歴史として震災経験を継承する活動が進展している。特に、福島県立博物館やとみおかアーカイブミュージアムなど、博物館展示として地域の歴史に地震や津波、原発災害の経験を位置づける試みが進められる。そうしたなか、本稿では、自治体史に震災経験を位置づける取り組みについて紹介したい。

二〇二二年三月に刊行された『岩沼市史Ⅱ 特別編Ⅲ震災』（以下、『震災編』）は、東日本大震災に特化した自治体史として、宮城県岩沼市にて刊行された。同書は、東日

岩沼市史

Ⅱ 特別編Ⅲ
震災

岩沼市史編纂委員会編
『岩沼市史』第11巻特別編Ⅲ震災

発行 岩沼市
2022年3月31日
B5判 555頁
販売価格 3,000円

詳しくは岩沼市HP『『岩沼市史』
の紹介』欄参照
<https://www.city.iwanuma.miyagi.jp/kanko/rekishi/shishi/>

本大震災を取り扱った最初の自治体史であり、自然、歴史、民俗の観点から総合的に震災の経過を扱ったものである。二〇〇八年に開始した岩沼市史編纂事業では、当初から『震災編』の刊行が計画されていたわけではない。二〇一一年に岩沼市域が地震・津波被害を受けたことで、一連の被災経験を市の歴史と捉え、急遽岩沼市史の最終巻として『震災編』の企画・調査・執筆・編集が進められた。その意味では、自治体内で如何なる議論や手続きを通して『震災編』が提起され、調査や執筆者選定等が行われていたのかは、岩沼市における震災認識を知る上で重要な点であろう。しかし、筆者はあくまで『震災編』執筆者の一人に過ぎず、如上の諸点を検討し、論じるだけの準備を持たない。そのため、本稿では、『震

『震災編』執筆者の立場として、編纂事業前後における筆者の活動と、執筆担当に関する意図について紹介し、いくつかの雑感を並べることで、筆者に与えられた責を果たすこととしたい。

一 東日本大震災時における岩沼市と『震災編』

宮城県東南部に位置する岩沼市は、二〇一一年三月一日に発生した東北地方太平洋沖地震で震度六弱を観測し、沿岸部六地区が津波により壊滅的な被害を受けた。岩沼市は地域の約半分が浸水する広域的な被害を受けた。

市内各所で被害が発生し、その後も多方面で復旧・復興に向けた取り組みが進むなか、岩沼市は二〇一三年に『震災編』の作成を決定する¹。その後、二〇一六年四月に『震災編』の部会が発足し、二〇二二年三月に完成・刊行となった。市および編纂室における協議・合意過程については、筆者の知っているところではないが、筆者も二〇一六年四月より専門執筆調査委員（震災部門）の委嘱を受け、調査・執筆を行った。

『震災編』の構成は以下の通りである。

- 一章 自然環境と地震・津波
 - ……柳澤英明・平吹喜彦・菅原大助（59頁）
 - 1節 地震・津波発生メカニズム
 - 2節 地震・津波による地形変化
 - 3節 砂浜海岸エコトーンの破壊と再生
- 二章 震災と初期対応……天野真志（55頁）
 - 1節 地域の被害と状況把握
 - 2節 避難所運営と生活復旧
 - 3節 被災者支援の展開
 - 4節 生活復旧に向けた対策
- 三章 復興と再生……徳竹剛・天野真志・佐藤信夫（50頁）
 - 1節 復興計画
 - 2節 震災復興の進展
 - 3節 震災復興から未来へ
 - 4節 災害の記憶継承に向けた取り組み
 - 5節 復興と財政
- 四章 玉浦西の暮らし……稲澤努（31頁）
 - 1節 地域の様子
 - 2節 人々のつながりとなりわい
 - 3節 行事とイベント

五章 未来への伝言………木村敏明（179頁）

- 1 節 まち・ひとを守る
 - 2 節 まち・ひとを支える
 - 3 節 まち・ひとを結ぶ
 - 4 節 まち・ひとを想う
- 特論 揺れ動く文化

- I 海岸林の暮らしの歴史
 - II 貞山堀の沿革と復興事業
 - III 沿岸6集落のかつての暮らし
 - IV 震災と方言
 - V 被災した文化財と調査保全活動
- 付図1 東日本大震災関連岩沼市全図
- 付図2 沿岸域の移り変わり
- DVD いわぬまのしんおん

『震災編』の構成は、地震・津波のメカニズムや震災による地形の変化などを扱う自然編（第一章）、災害発生から復興に向けた過程をテーマとした歴史編（第二章、第三章）、地域住民の生活を伝える民俗編（第四章、第五章）に大別される。

「第一章 自然環境と地震・津波」は、震災による自然環境の変化、特に自然環境と地震、津波を紹介している。震災によって岩沼市という地域の基盤や自然環境がどのように変化していくのかについて、津波工学や地震工学、自然科学的な立場から分析、検討して叙述されている。

「第二章 震災と初期対応」は筆者の担当した章であり、二〇一一年三月一日から避難所が閉鎖される六月までの過程を対象としている。

「第三章 復興と再生」は、復興に向けた取り組みについて、避難所が閉鎖して仮設住宅を経て復興住宅に移行する過程を扱っている。特に、復興住宅の建設や地域経済の復興に向けた議論の経過が描かれている。本章は、徳竹剛（福島大学行政学類）が中心となつて執筆し、佐藤信夫が「復興と財政」を、筆者が「災害の記憶継承に向けた取り組み」を担当している。

「第四章 玉浦西の暮らし」については民俗調査の成果を踏まえた構成である。岩沼市の中に玉浦西地区という地区があり、同地区の変遷とその過程における地域住民のコミュニティの変容について描いている。

最終章である「第五章 未来への提言」では、震災編

の部長でもある木村敏明（東北大学文学部）が担当し、二〇一九年から二〇二一年にかけて岩沼市の災害対策や復興に関わる様々な関係者に聞き取り調査の成果を収録する。

このほか、特論として、海岸林の歴史、貞山堀の沿革や成り立ち、民俗としての暮らしや方言の問題、被災した文化財のレスキュー事業などについて取り扱っている。また、岩沼市の全図や沿岸域の変容図に加えて、復興プランのDVDが付録として収録している。

岩沼市では、『東日本大震災 岩沼の記録』と題する記録誌を発行しており、二〇一二年三月に発行後、同じ名称の記録誌を断続的に更新、発行している^②。また岩沼市内に拠点を持つ企業や諸団体等も独自の記録誌を作成・発行し、さらに当時岩沼市長を務めた井口経明による回想録や被災した市民から集めた証言録が刊行されるなど、震災以降の岩沼市を把握するための情報・記録は少なくない。特に、岩沼市が二〇二〇年に大部な記録誌を刊行したことを踏まえ、『震災編』では行政的な対応に収斂せず、各種の記録誌や独自の調査を踏まえて多様な観点による震災叙述が模索された。

二 岩沼市における震災資料調査

筆者担当分は、市史編纂室による調査に加え、『震災編』に携わる以前に筆者が関わった岩沼市内の調査活動に基づいている。特に、岩沼市内で収集・保存された、震災資料の存在は、『震災編』の執筆にとって極めて重要な記録群となった。

岩沼市における震災資料の収集・調査活動は、二つの段階が指摘できる。最初の調査活動は、岩沼市史編纂室による収集・調査活動である。二〇一二年当時市史編纂室の職員であった高橋陽一は、市史編纂室の復旧作業や被災資料の対応を行う傍ら、六月頃より市内の避難所や災害対策本部の調査を実施し、市内で最大の避難所となった岩沼市民会館における震災関連資料や災害対策本部の会議録を複写している^⑤。こうした高橋による調査活動やその過程で収集した諸資料の存在が、その後『震災編』の企画や執筆の重要な基礎情報となったことはいままでもない。

筆者が岩沼市の震災資料調査を始めたのは二〇一三年からである。二〇一三年度東北大学災害科学国際研究所特定プロジェクト研究（共同研究B）として「東日本大震災の震災資

料の所在調査および収集・保存の手法等に関する検討——宮城県岩沼市をフィールドとして——」（代表・奥村弘）が組織され、当時東北大学災害科学国際研究所に勤めていた筆者は、その受け入れ教員として共同研究の運営と調査を担当した。

この共同研究では、かつて編纂室が収集した震災資料の全容調査を行い、資料作成に携わった当時の職員や避難所で生活していた人びと、避難所支援に訪れた市外の人びとなどに聞き取り調査を行った。聞き取り調査に関しては、主に筆者と小幡圭祐（当時東北大学大学院）の二名で実施し、市史編纂室から多くの助力を得た。神戸大との共同研究は一年間で終了したが、その後市史編纂室と協力しながら追跡調査を実施することもあり、これら一連の調査が後の『震災編』につながったものと考えている。

三 『震災編』の成果と課題

前述の通り、二〇一六年四月から市史・震災部会が本格始動し、筆者も『震災編』の刊行に向けて調査・執筆を進め、二〇二二年三月に無事刊行となった。筆者が『震災編』の全容を総括する準備はないが、自身の担当分に限定した成果と

課題について考えてみたい。

一連の調査や執筆における自身の目的は、震災をめぐる岩沼市の経過を残された資料を通して見つめ直すことであった。震災当時、筆者は仙台市に居住していたが、近隣の岩沼市に関しては被害状況や具体的な取り組み等を詳細に知ることはなかった。そのため、震災資料に記された事項について、関連情報の調査をおこなうとともに、関係者に聞き取りを実施して当時の状況を把握することが必要であった。結果的に、そうした調査と検討の蓄積が『震災編』の基礎となり、限定的ながらも当時の状況を追体験する機会ともなった。

一方で、二〇一七年に筆者が国立歴史民俗博物館に転任し、活動拠点が宮城県仙台市から千葉県佐倉市に移ってしまったため、岩沼市での調査が限定的になってしまった点は否めない。加えて執筆が本格化した二〇二〇年には感染症流行の影響で現地調査がほぼできなくなり、最後の段階で現地での確認作業ができなかったことは、執筆過程における問題でもあった。この点については、不足情報の補完や情報収集・提供に尽力いただいた編纂室事務局に改めて御礼申し上げます。

執筆内容等については、今後各所からの批評を待つほか

いが、現代史研究や震災研究の蓄積を持たない立場で震災を叙述することに大きな葛藤があった。また、岩沼市の研究はもちろん、居住経験すらない筆者が、二〇一一年の震災経験を市の歴史としていかなる観点で論じることができるのか、少なからず苦悩していた。それ故に、記録誌や聞き取り情報と震災資料を重ね合わせ、岩沼市の震災を紹介するという概括的な記述が多くを占め、経験の深部まで探ることができなかった点は大きな反省点である。これらについては、今後の東日本大震災研究が進むなかで検証・批評され、新たな震災像が提起されることを願っている。

おわりに

災害が多発し、全国各地で様々な災害経験が蓄積されるなか、当業者やその周辺関係者がそれらを検証し、地域や人びとの歴史として災害を捉え直すことは、今後さらに増えることが想定される。オーラルヒストリーが定着し、歴史資料としてそれらを保存・活用する取り組みが検討されるなか、震災資料や聞き取り情報を継承していくためには、自治体史編纂を始めた地域の歴史として検証し活用する取り組み

は重要となるだろう。その意味で、『震災編』は岩沼市の被災・復旧・復興経験を記憶し継承するための基盤的な取り組みとして位置づけられるかもしれない。そのためには、編纂事業で蓄積した諸資料を如何なるかたちで保存し活用・継承するのか、今後の取り組みが注目されよう。筆者が担当した第三章四節「災害の記憶継承に向けた取り組み」では、震災資料に注目し、収集・保存する岩沼市内の取り組みを紹介し、一連の資料群が震災を語る基幹となっていることを伝えようとした。こうした取り組みが市史編纂事業という市の取り組みとして進められたことは重要であり、聞き取り記録を含めた震災関連資料を永く保存・継承していくことが求められる。震災を契機として企画・刊行された『震災編』を手がかりに、岩沼市において震災資料の継承に向けた議論が進展することを目指す。

註

(1) 「被災・復興 岩沼の市史に」(『朝日新聞 宮城版』二〇一九年九月七日版)。

(2) 最新版は『東日本大震災 岩沼の記録』(岩沼市、二〇二〇年)にて下記より公開されている。(https://www.city.iwanuma-miyagi.jp/bosai/fukko/shinsaiapli/documents/kitokushi.pdf)

最終閲覧二〇二三年八月九日。

(3) 井口経明『千年希望の丘』ものがたり』（プレスアート、二〇一五年）。

(4) 「東日本大震災 あの時、岩沼では…」編集委員会編『東日本大震災 あの時、岩沼では…。 — 50人の証言 — 』（国井印刷、二〇一二年）。

(5) 高橋陽一「歴史資料保全と地域行政」(『歴史学研究』八九〇、二〇一二年)。

(6) 安岡健一「オーラルヒストリーを受け継ぐために」(『日本オーラル・ヒストリー研究』一五、二〇一九年)。